田中博秀著『現代雇用論』

日本労働協会，1980年6月，427＋viii ページ

本書は，昭和49年から54年までの5年間の「日本経済にとって高度成長から低成長への転換という大きな試練のとき」の著者の記録である（まえがき）.『現代雇用論』という本書の題名は，雇用問題を非常に広い意味でとらえ，「単に雇用労働者（employee）に関する問題のみ」を指すのではなく，「通常の用語に従えば就業者(employed person）すべてに関する問題を指すもの」として用いたことに依るものであり，雇用問題に関する伝統的な切り込み方――例えば産業別構造の問題として，あるいは規模別，所得階級別構造の問題として等――に新しい視点を加え，さらに「新しい切り込み方」を用意しようとする著者の意気ごみによって名付けられたものである（序章）. このような問題意識のもとに著者は，日本の労働力供給構造が後進国型から先進国型へ変わりつつあることを基本にすえ，このテーマを高齢化，高学歴化，女子化，サービス経済化の側面から実証的に分析し，その上で日本的雇用慣行の特性と政策との関わりを論じ，高齢化の進むなかで日本的雇用慣行の再構築が重要であることを指摘している．以上の論旨は，本書の次のような構成のもとに展開される．

序章　雇用問題の新しい視点

第Ⅰ部　労働力供給構造の変化とその問題点――高齢化問題を中心として――

第Ⅱ部　サービス経済化と労働力需給構造の変化

第Ⅲ部　日本的雇用慣行の特徴と今後の課題

序章において著者は，「高度成長期のあとの構造的諸条件の中で，まったく新しく政策的関心から雇用問題を考え直してみる必要がある」ことを指摘し，この視点から労働力供給構造の変化を実証的に分析した上で，この「労働力供給構造の変化への適応」が現代の雇用政策の最も重要な課題の一つであることを力説している．

第Ⅰ部および第Ⅱ部は上に述べた見地から労働力供給構造の変化の実証分析にあてられている．特に労働力の供給母胎である人口の高齢化によってひきおこされる労働力の高齢化および高学歴化の進行，女子労働力の増大傾向を詳しく分析し，さらに近年の第3次産業の雇用拡大の過程と今後の見通しに言及する．第2次産業は技術の高度化・省力化などの影響によって，労働力の吸収，雇用機会の拡大という面においてはしだいにその役割が小さくなっており，サービスを提供する第3次産業が多様な就業形態を示しながら新たな労働力の需給構造を作りつつある．著者は，第3次産業が不完全就業という問題をはらみながらも，労働力供給構造の変化と相まって，より多様なサービスを求める国民のニーズを充足するために，第3次産業部門における就業形態が多様性をもつことをむしろ積極的に評価すべき側面のあることを指摘している．

本書において著者が最も力点をおいているのは，第Ⅲ部で展開される日本的雇用慣行の諸問題であり，その分析の基点に企業の労働需要が「新規学卒採用方式」によって成り立ち，この集団がいずれ企業の基幹労働力となることを前提としたオールラウンドな企業内教育によって育てられ，安定した雇用慣行を形成してきたという非常に興味ある分析を行っている．しかし労働力の高齢化はこの日本的雇用慣行に何らかの変更をせまるものであり，その時に著書のいう政策の対応もむづかしいものとならざるをえないだろう．

労働力の高齢化と，女子労働力の進出とは特に多様化する第3次産業において競合関係をなし，不完全就業を増大させるものと思われるが，この点について，きれいごとではない著書の考えを聞きたいものである．

（中野英子）